6. 成績分布

全受講生 27 名

評価	評価数	割合（%）*小数点以下四捨五入
秀		
優		
良		
可		
不可		
評価せず		

7. 実施状況

（1）専門職倫理

新渡戸カレッジが実施する専門職倫理に関する授業は、以下のような目的で実施されている。

(ア)学生が自らの研究分野を超えて、知識と関心の多様性を尊重することが専門家としての第一歩であり、違いの相乗から生まれる共通の倫理的問題について議論する。

(イ)全学プログラムであることを念頭に、北大教員・研究者の経験と知識を活用する。

今回は以下の内容で外部講師に依頼した。

・12 月 22 日（木）　研究の軍事利用 Research and Dual Use；眞嶋俊造（東京工業大学）

（2）プロジェクトマネジメント

大学院基礎科目 I は、創造的思考、批判的思考、リーダーシップや専門職倫理といった、チームで協働するための個々の能力を重点的に扱ってきた。大学院基礎科目 II は、これらの能力を前提とし、チームでプロジェクトを効果的・効率的に遂行するためのプロジェクトマネジメント(PM)を取り上げ、課題プロジェクトを実施しながら体得する方針を取っている。時間的な制約もあり、PM のごく初歩的な部分のみを取り上げ、様々な活動に応用できる要素に絞って提供した。PM を学修する理由と狙いは以下の通りである。

① Project-based learning（PBL）形式の講義への対応；新渡戸カレッジ大学院教育コースでは PBL 形式の講義を実施しており、チームでプロジェクトを実行するための体系的な知識と経験を身につける必要がある。

② 修士研究活動への応用；研究をはじめとする課題解決はプロジェクトであり、プロジェクトをどのように計画し、遂行するのかを経験しておくことは、大学院生の日々の研究活動においても必要不可欠である。

③ 社会問題解決への応用；複雑な構造をしている現在の社会問題を解決するには、倫理観に基づき、ステークホルダーやリスク管理に注意を払いながらプロジェクトを実行する必要がある。

④ 世界標準；学生が将来グローバル社会で活躍するために、現時点で世界標準であるプロジェクトマネジメントの手法を学んでおくことは重要な経験となる。

（3）課題プロジェクト 1；How Can We Solve an Urban Brown Bear Problem in Sapporo?

課題プロジェクト 1 のトピックは、近年札幌市で問題となっている、居住域へのヒグマの頻繁な出没に対して、オリジナリティのある解決策を提示することであった。このプロジェクトを企画立案するにあたっては、基礎科目 I で学んだ、創造的・批判的思考、リーダーシップ、コラボレーションなどを活かしながら、かつ、そのプロジェクトを確実かつ効率的に実施できるように、基礎科目 II で学んでいるプロジェクトマネジメント（PM）の手法を適用した。課題プロジェクト 1 の立案は PM の解説講義と同時進行でなされ、学んだことをそのままプロジェクトに応用する方法が採られた。4 週目に行なわれたチーム毎のプレゼンテーションは、PM の知識とツールをどのように自らの企画立案の中に取り入れたかを示しながら行われた。

（4）課題プロジェクト２；”Promote Hokkaido to the World”

課題プロジェクト２では、課題プロジェクト１を通して学んだ PM の知識とツールをさらに有効に使うことを目指すとともに、基礎プログラムを通して学んできた知識とスキルを駆使した。プロジェクト２のトピックは、『北海道を世界に売り込む』である（この課題は今学期から採用した）。各チームでは、トピックから独自に案を作り出し、それを達成するための工程を、PM を用いて提示した。ディスカッションを通してプロジェクトを洗練させていく過程では、多様な価値観や知識が必要とされた（参考資料９(1)）。８週目に行なわれた学内公開のプレゼンテーションでは、メンター（中島徹氏、15th Rock Ventures/Spirete Inc.）を招いて発表に対する講評および PM を用いた自身の実務経験に基づいた講演を受けた（参考資料９(2)）。講演では、PM の知識のみならず予算見積りなどの現実的な側面にも注意する必要があることを学んだ。

（5）ターム自己評価レポート

基礎科目 II（冬ターム）は、基礎科目 I（秋ターム）で修得した知識や技能を基にして、PM の知識を活用してチームでプロジェクトを実施する。このため、レポート課題も、基礎科目 I の学修と基礎科目 II の学修を合わせた自己評価を問う内容となっている。また、基礎プログラム全体を通して学生が何を学ぼうとしたか、それがどの程度達成されたか、さらに将来への展望について論述する総括的な問いも含めた。

8. 課題・改善点

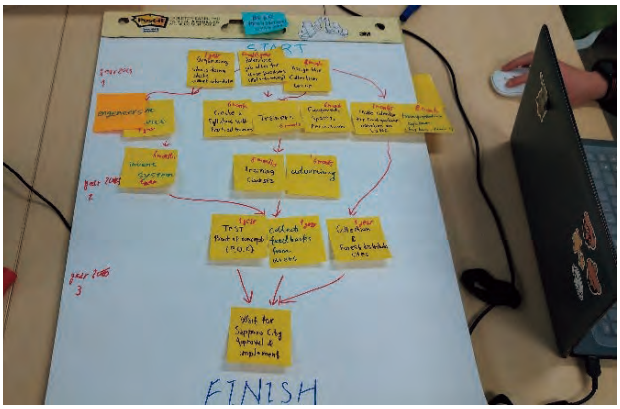
（1）これまで基礎科目 II は、基礎プログラム全体のなかで中盤・後半にあたり、学生の集中が途切れている感があったが、今学期は学生の授業参加が順調であった。これは、授業が全面的に対面に移行したことでチーム内のコミュニケーションがスムーズに行えたことによるものと考えられる。これにより、最後まで学習意欲を低下させることなく本科目を終えることができた。受講生の意欲が継続できたもう一つの背景は、今回新しく設定した課題プロジェクト 2 にもあったと考えられる。プロジェクト 2 の新たなトピックとして、部局担当教員の三浦篤志准教授（理学研究院）の発案により、“Promote Hokkaido to the World” が設定された。自らが居住する北海道の魅力を海外にアピールするという身近な課題設定であったことで、受講生の関心が高かった。さらに、今学期は留学生が 27 名中 21 名いたこともディスカッションを活発にした要因と考えられる。これらの背景があいまって、受講生は意欲を低下させることなく、基礎科目 II を最後まで受講できたと考えている。

（2）対面授業にあっても、受講生間でペンなどの共有を避けることを徹底し、秋タームの基礎科目 I 同様に紙製ホワイトボードの利用や、オンライン上でプレゼン資料の共同作成ができるようにした。また、各受講生には専用の透明のつい立てを準備し、学生の求めに応じて配布できるようにした（今学期は実際に利用した学生はいなかった）。今学期も不織布マスクの正しい着用、入出時の手指のアルコール消毒など大学が定める感染対策は徹底するよう教員と TA で監視と指導を行った。

（3）一昨年度冬タームより、NPFのチームワーク機能を利用することを必須としている。この結果、チーム内での毎回の議論やプレゼンテーションのスライド準備などの際に毎回の進捗状況をメンバー間でいつでも共有でき、効率的なワークが行われた。この取り組みは引き続き行っていきたい。

9. 参考資料

（1）対面授業の風景と紙製ホワイトボードによるディスカッションの様子



（2）第 8週に実施された学内公開のプレゼンテーション・ポスターと中島メンターによる講評・講演

令和４年度（2022）

北海道大学新渡戸カレッジ　大学院教育コース

オナーズプログラム（後期）実施状況

No.		科目名	単位数	頁
①	主要科目	大学院発展科目Ⅰ（課題解決）	2	
②	選択科目	大学院発展科目Ⅱ（問題発見）	2	
③	選択科目	プロジェクト実行科目	1	
④	選択科目	大学院特別演習： ソーシャル・イノベーション	2	
⑤	選択科目	大学院特別演習： デモーラ（企業課題解決演習）	1	
⑥	選択科目	大学院特別演習： Hult Prizeチャレンジ	1	

令和４年度オナーズプログラム(後期)の実施状況について

秋ターム「大学院発展科目Ⅰ」（課題解決）実施状況

1. 実施日時
期間　　：2022 年 10 月 19 日(水)～12 月 7 日(水)
曜日(時限)　：水曜日（5・6 限目）
＊ただし、 第 6、7 週は 5・6・7 限目に実施
回数　　：1 回 2 コマ（3 時間）×8 回
場所　　：高等教育推進機構 S5 教室

2. 実施体制
科目責任者　　：繁富香織（高等教育推進機構）
授業担当教員　：Branislav Hazucha (大学院法学研究科)、繁富香織（高等教育推進機構）
ティーチングアシスタント(TA)：
Dale Lee Whitfield（大学院教育学院）、Das Mahapatra Gaurab（大学院工学院）

3. 授業目的・目標
（1）授業目的
本科目では、専門性の異なる学生がチームを組み、それぞれの専門性の強みを活かした協働を通して、与えられた課題に対して解決策を提案する。原因、先行事例の調査や論拠となるデータを課題のコンテキストに即して分析し、異なるアイデアを統合して、独創的な解決案を創出する。また、ビジネスプラン等の検討を通して解決策が実行可能になるかを考え、対ステークホルダーを想定したプレゼンテーションを行う。
（2）授業目標
- 具体的な課題の解決に向けた生産的協働のためのチームマネジメント（役割の明確化と実践）ができる。
- 提示された課題に対して、先行事例、類似事例に関する適切な二次資料の収集および課題の背景とコンテキストに照らした批判的な比較分析ができる。
- 解決策の提案に必要な調査・分析手順を設計し、それに伴う時間管理ができる。
- 得られたデータや情報とそれらの論理的解釈に基づいた説得力のあるプレゼンテーションができる。
- アントレプレナーシップ（起業家精神）について理解を深める。

4. 評価方法
- 授業への積極的参加とチーム学習への貢献
- チームによるプレゼンテーション(2 回：中間、最終プレゼンテーション)
- Nitobe Logbook に記す学修記録と自己分析
- Nitobe Portfolio (NPF)の有効活用: 授業へのフィードバックコメントやチームワーク機能
- ターム最終自己評価レポート

5. 授業内容

	授業内容
第 1 週 (10/19)	ガイダンス、教員による導入講義 ● 授業の目標、評価方法などの説明、学生が取り組む社会的課題の提示 ● 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)に基づき、担当教員と特任教員の協議により課題を決定 ● 担当教員によるテーマに関する導入的な講義

7　新渡戸カレッジ授業概要、特別講演概要、行事概要

第 2 週 (10/26)	教員による導入講義・課題解決のためのプロジェクトプランニング(1) ● 引き続き担当教員によるテーマに関する講義 ● 学生は、講義で提示された背景の中から 1 つの課題を選択 ● 選択した 3 課題に対する調査の開始；最終的に 1 つの課題を選択し、大学院基礎科目 II で学修したプロジェクト・マネジメントに基づき、調査プロポーザルの作成を開始
第 3 週 (11/9)	教員による導入講義・課題解決のためのプロジェクトプランニング(2) ● 引き続き担当教員によるテーマに関する講義 ● 前回に引き続き、選択した課題のプロポーザル作成
第 4 週 (11/16)	課題解決のためのプロジェクトプランニング(3) ● 前回に引き続き、選択した課題のプロポーザル作成 ● 次週開催のプロポーザルプレゼンテーションの準備・資料作成（9. 参考資料）
第 5 週 (11/23)	プロポーザルプレゼンテーション（中間発表） ● プロポーザルプレゼンテーション資料の作成 ● 選択した課題の解説とその解決策の提示までのプロジェクトをまとめた各チームのプロポーザルプレゼンテーション
第 6 週 (11/30)	プロジェクトの実行(1) ● プレゼンテーションに対する教員やクラスメイトのフィードバックコメントに基づくプロポーザルの改善 ● プロポーザルにしたがった調査の推進と解決案の検討；インターネットなどのリソースを活用した文献調査、教員のアドバイスに基づくアイデア出しと分析
第 7 週 (11/30)	プロジェクトの実行(2)、　発表リハーサル ● 次週の最終プレゼンテーションのリハーサル ● 最終プレゼンテーションにむけて解決案をまとめ、リハーサルのフィードバックに基づいてスライドを作成
第 8 週 (12/7)	最終プレゼンテーションと振り返り ● 最終プレゼンテーション；1 チーム 45 分(20 分発表+10 分質疑応答+15 分教員・メンターのコメント) ● 外部講演者（平井翔大、Latara 株式会社、新渡戸スクール修了生）による「学生で起業すること」について講演（9. 参考資料）

6. 成績分布

全受講生 21 名

評価	評価数	割合（%）
秀		
優		
良		
可		
不可		
評価せず		

7. 実施状況

（1）課題テーマと実施プロジェクト

テーマの大枠を「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs)」と定め、 関連するテーマを担当教員の専門性に基づいて担当教員と特任教員で話し合い決定している。本ターム は、SDGs17 の目標のより学生が関心のある目標を選択して課題を調べ、解決案とビジネスアイディアを検討した。選択した SDGs のトピックとプロジェクト名は以下の通りである。

- SDG 2 – No Hunger: Reducing Food Loss
- SDG 3 -Good Health: Alcohol Agent
- SDG 4 – Quality Education: Memory Mentor

- SDG 10 - Reduced Inequality:　PERFECTIRE ~Special hiring support for bright future of youth with diverse roots. For bright future of Japan~
- SDG 13 - Climate Action: Electronic Mobile Home (EMH) ~Mobile Home with batteries~

（2）担当教員による講義

授業では、起業家精神の内容を昨年から加え、課題解決を目的とすると同時に解決策の実効性に関してビジネスの視点をもって考えることの重要性や担当教員自身の起業の経験について話していただいた。受講生は課題に対して技術的な解決策だけではなく、その解決策をどのように社会に波及させるかを検討することができた。

（3）チームディスカッションとプロポーザルプレゼンテーション

第 4 週までは、大学院基礎科目 II で学修したプロジェクト・マネジメントを用いて、課題解決策を提示するまでのプロジェクトを計画した。それぞれのテーマに関して、その背景を理解し、到達目標を決めるプロポーザルを作成した。第 5 週目でクラス全体に発表する機会をつくり、他チームの学生や担当教員からフィードバックコメントを受け、プロポーザルを改善する方法を採用した。

（4）講演者の参加

最終プレゼンテーションに外部講演者（平井氏）に参加していただいたことで、学生にとって緊張感のある発表とすることができた。平井氏は現在博士（北大）で研究している内容を元に起業をしている。なぜ起業したのか、さらに企業における問題解決のプロセスについて聞くことで、学生が本授業で身に付けたことがどのように社会で役に立つのかを考える機会となった。平井氏は新渡戸スクール修了生であり、学生にとっては身近なロールモデルとして、起業を考えるきっかけになったようである。

（5）NPF

学生は基礎プログラムから NPF を利用して授業を進めている。チームページや教員からのフィードバックコメントの活用に見られたように、担当教員とのコミュニケーションやチームでプロジェクトを取り組む際の支援において効果を発揮した。

8. 課題・改善点など

新渡戸カレッジの授業では、学際的なトピックに対し様々な専門性や文化的背景を持つ学生がチームでプロジェクトを行う。学生が専門的な知識を持たないトピックになることもあるため、結論となる解決策の質を高めることは困難となる場合がある。個々の学生は自身の専門性などの背景に基づいたアプローチやアイデアを提案し、チームとしてそれらを融合していくことが必要になる。このようなチームワークの展開ができるように基礎プログラムから訓練すること、教員が適切に指導できるようになることが課題になる。

9. 参考資料

最終授業（学内公開）様子

最終授業（学内公開）様子

冬ターム「大学院発展科目 II」（問題発見）実施状況

1. 実施日時

期間　　：2022 年 12 月 14 日(水)～2023 年 2 月 1 日(水)
曜日(時限)　　：水曜日（5・6 限目）
　　＊ただし、第 6、7 週は 5・6・7 限目に実施
回数　　：各クラス週 1 回 2 コマ（3 時間）× 8 週間
場所　　：高等教育推進機構 S5 教室、Zoom（最終授業はハイブリット）

2. 実施体制

科目責任者　　：繁富香織（高等教育推進機構）
授業担当教員　　：Coker Caitlin（大学院文学研究院）、繁富香織（以上、高等教育推進機構）
ティーチングアシスタント(TA)：Dale Lee Whitfield（大学院教育学院）、Das Mahapatra Gaurab（大学院工学院）

3. 授業目的・目標

（1）授業目的

本科目では、与えられたテーマについてフィールド調査によって収集した一次データを分析し、解決すべき問題の発見や自明とされる問題の批判的な検討を行う。また調査結果を的確にまとめて一般公開の場で発表し、プロジェクトの結果を社会（調査の協力者・対象者含む）に還元することによって、自らの専門性が持つ社会への影響力、専門職倫理への意識を高める。調査研究などアカデミックなものにとどまらず、すべてのプロジェクトは「問い」すなわち問題の設定からスタートする。あえて、問題発見をプログラムの締めくくりに取り組むことで、将来のキャリア形成に不可欠な「問うこと」の重要性を再認識し、意義のある問題を設定するために必要な能力を身につける。

（2）授業目標

- 意義ある問題の発見に向けて、きっかけとなる問いの設定、調査地・調査対象の選定、調査方法の検討など調査計画を立てることができる。
- 培ってきたコミュニケーション能力を活用し、参与観察、インタビュー、フォーカスグループ、調査などを実施することができる。
- 調査の過程で発生する倫理的な問題を想定した準備を行うことができる。また、問題が発生した場合、適切に対処できる。
- 収集したデータを整理し、コンテキストに照らして客観的に分析して、議論を組み立てることができる。
- 調査・研究の結果を発表し、また求めに応じてプロジェクトの参加者・協力者、その他広くステークホルダーに適切に開示することができる。

4. 評価方法

- 授業への積極的参加とチーム学習への貢献
- チームによるプレゼンテーション（2 回：中間、最終プレゼンテーション）
- チームによるプロジェクト報告レポート
- Nitobe Logbook に記す学修記録と自己分析
- NPF における授業内容へのコメントと「3+1 の力」の自己評価

5. 授業内容

	授業内容
第 1 週 (12/14)	オリエンテーション ● 目的と授業の進め方 ● 学習目標、特にチーム学習の重要性 ● 授業実施上のルールや規則、授業日程 プロジェクトテーマ選定とプロポーザル作成 ● フィールド調査の方法、倫理に関する基礎、プロポーザルの重要性に関するガイダンス講義 ● テーマによって学生が自由にチームを形成 ● 各チームのテーマをめぐり、プロジェクトテーマの選定と所定のフォームに沿ったプロポーザル作成作業
第 2 週 (12/21)	プロジェクトテーマ選定とプロポーザル作成 ● 引き続きチームでのディスカッションを通して、プロジェクトテーマの選定と所定のフォームに沿ったプロポーザル作成作業
第 3 週 (1/4)	プロポーザル作成／予備フィールド調査 ● プロポーザルが完成していないチームは引き続きディスカッションを重ねてプロポーザルの作成 ● プロポーザルが完成したチームは、関連する先行研究の情報収集と調査先の選出を行い、オンラインでのインタビューなどに向けた連絡の開始
第 4 週 (1/11)	プロポーザル・プレゼンテーション ● 完成したプロポーザルを基に、プロジェクトの目的、重要性、出発点となるリサーチ・クエスチョン、方法論とデータ収集方法についてのプレゼンテーション ● 外部講演者（辻輝之氏、広島大学）による学生の中間発表へのアドバイスおよびフィールド調査の方法と重要性に関する講演
第 5 週 (1/18)	プロポーザルに基づいたフィールド調査の実施／データの分析
第 6 週 (1/25)	プロポーザルに基づいたフィールド調査の実施／データの分析
第 7 週 (1/25)	データの分析と最終プレゼンテーションの準備
第 8 週 (2/1)	最終プロジェクト・プレゼンテーション　（9.参考資料） ● 最終プレゼンテーションの一般公開（修了生: 1 名、新渡戸カレッジ学部生: 1 名、一般参加者: 1 名参加） ● メンター（萩野泉氏、株式会社電通 クロスブレイン）による学生の発表へのアドバイスおよび問題発見について講演（9.参考資料(3)）

6. 成績分布

受講生：20 名

評価	評価数	割合（%）*小数点以下四捨五入
秀		
優		
良		
可		
不可		
評価せず		

7. 実施状況

(1) 課題テーマと実施プロジェクト

「Diversity in Society – As one can grow from difference」をテーマとし、社会の多様性を理解するために、フィールド調査によって収集したデータの分析に基づき、インクルーシブな社会の実現に

向けて今後考えるべき問題の発見（Problem Finding）を目指した。テーマは、大学院発展科目 II の担当教員と特任教員で話し合い決定した。テーマから着想するプロジェクトを 5 つのチームが実施した。プロジェクト名は以下の通りである。

- What difficulties do foreign workers face?
- How do people get into gambling?
- How do local musician's network?
- How is sign language used?

(2) プロポーザル作成の徹底

プロポーザル作成に時間と労力を傾注するようアドバイスしたことによって、興味深く意義のあるテーマからフィールド調査が比較的スムーズに実施され、実のある最終プレゼンテーションに繋がったと考える。8 週間という限られた時間でフィールド調査を実施し、データ分析と成果発表を行い、さらに最終レポート（グループ）を書く必要がり、他のターム科目よりも高いレベルの参加と貢献が求められたが、学生からは有意義な体験であったという意見が聞かれた。

(3) プレゼンテーションの一般公開

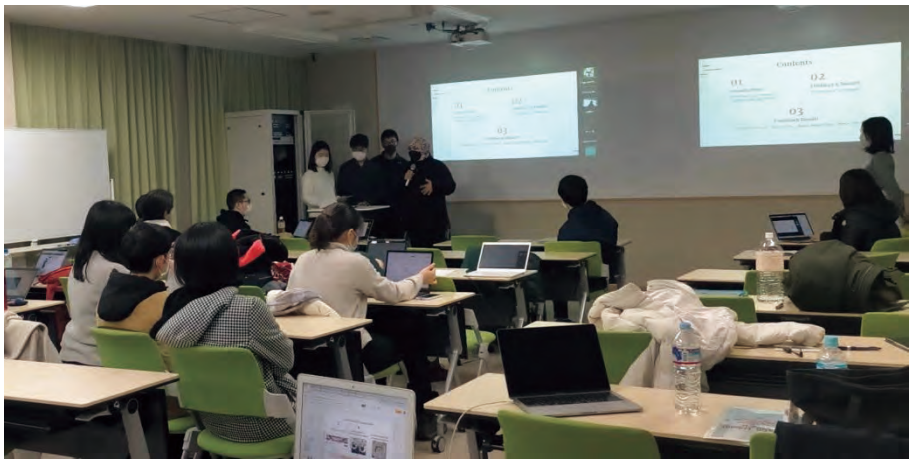
中間発表と最終発表に、外部講演者や一般参加者（一般参加は最終発表のみ）に参加していただいたことで、学生にとって緊張感のある発表とすることができた。外部講演者から実社会における問題発見のプロセスについて聞くことで、学生が本授業で身に付けたことがどのように社会で役に立つのかを考える機会となった。

8. 課題・改善点

基礎プログラムの大学院基礎科目 I、II とオナーズプログラムの大学院発展科目 I では、課題解決を訓練してきたため、学生は与えられた問題に対して解決策をディスカッションすることには慣れてきたが、真の課題、問題は何かを見つけ出すことにはまだ苦戦しているようであった。フィールドワークで気がついたことを発表していたチームもあり、問題発見とはなにかと言うことを授業で繰り返し学生に伝えることが重要であると感じた。

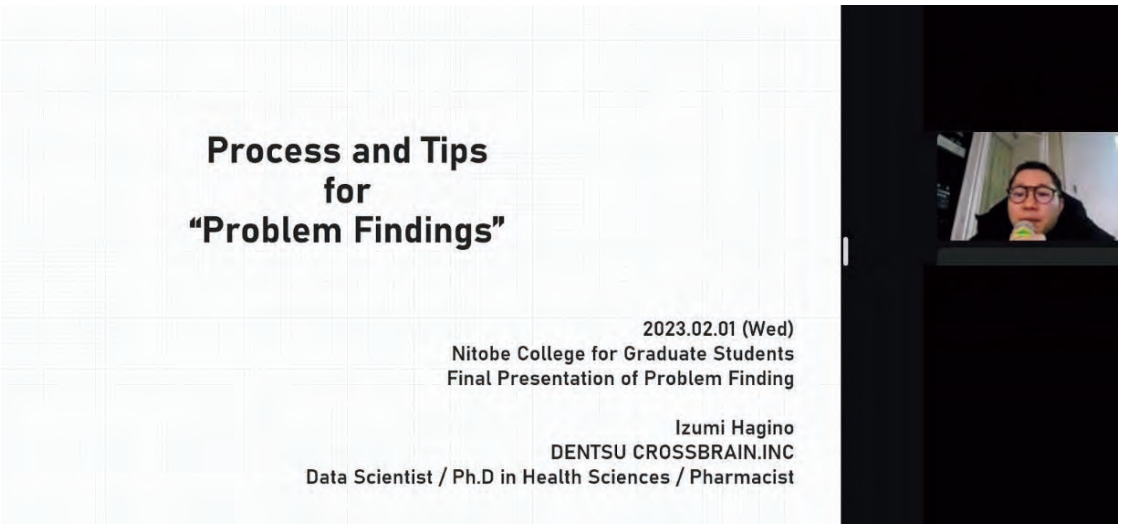
9. 参考資料

学生の最終発表の様子



最終授業（一般公開）の宣伝ポスター

萩野泉氏（株式会社電通 クロスブレイン）による講演の様子



冬ターム「プロジェクト実行科目」実施状況

1. 実施日時

期間　　：2 学期集中（1～2 月）
曜日(時限)　　：2023 年 1 月 5 日(木)、12 日(木)、26 日(木)、2 月 6 日(月)、8 日(水)
回数　　：各クラス週 1 回 2 コマ（3 時間）× 5 回
　　＊ただし、第 1、4 回目は 1 コマのみ実施
場所　　：高等教育推進機構 S7 教室（第 1～3 回）、オンライン（第 4 回)、
　　高等教育推進機構大塚ルーム（第 5 回）

2. 実施体制

科目責任者　　：谷博文（大学院工学研究院）
授業担当教員　　：繁富香織（高等教育推進機構）

3. 授業目的・目標

（1）授業目的

研究やビジネスのプロジェクトを立案し、実行する力は、将来研究者やビジネスパーソンとして活躍する上で不可欠である。またこれらを学生の段階で経験し、身につけておくことは、博士課程への進学や研究者へのプロモーション、企業への就職活動をする上でも有利となる。本授業では学生自らの専門的知識と新渡戸カレッジ基礎プログラム大学院教育コースで培った「3＋1 の力」（能力更新力、組織形成力、社会還元力、専門職倫理）を活用し、自らがリーダーとして国内外の専門家を集めたチームによるプロジェクトを提案・企画する。本授業を通して学生は、アイディアの創出能力と俯瞰的視座を獲得し、専門分野における研究をさらに飛躍的に高められるようになること目指す。

（2）授業目標

学生は以下の能力を身につける。

- プロジェクトのビジョンを明確に描く能力
  独創性：革新的アイデアを創出できる
  俯瞰力：領域内での研究活動だけでは獲得できない領域横断的な視座を身につける
- 伝える能力：プロジェクト計画書作成と英語でのプレゼンテーションに関する技法を身につける
- 時間管理能力：計画した時間内にプロジェクトを推進できる

4. 評価方法

授業への貢献度（授業積極性・発言内容など）：60%、ポートフォリオ（学修記録）：10%、計画書・プレゼンテーションの内容（事前課題に対する取り組み状況等を含む）：30%
成績評価は「合・否」とする。

5. 授業内容

	授業内容
第 1 週（1 コマ） (1/5)	ガイダンス、教員による講義 ● 授業の目標、評価方法などの説明 ● プレゼンテーションに関する技法の基礎講義；プレゼンテーションの構成、身振りなどについて学ぶ ● プロジェクト計画書の書き方の基礎講義；プロジェクトの計画書の構成や予算の基礎知識、チーム形成の方法、 計画書のブラッシュアップの方法について学ぶ
第 2 週（2 コマ） (1/12)	プレゼンテーション ● 自らのプロジェクト（修士研究や博士に向けて）のプレゼンテーション資料の作成と発表を行い、他者に明確に伝えられるようにプレゼンテーションをブラッシュアップする方法を学ぶ
第 3 週(2 コマ) 第 4 週(1 コマ) (1/26、 2 /6)	プロジェクト計画書のブラッシュアップ ● 第 2 週での担当教員および特任教員からのアドバイスを踏まえてプレゼンテーションを改善 ● 計画書を作成して担当教員によるチェックを受け、プロジェクトのブラッシュアップを行うとともに考えを明確化する ● 定められた期間内に計画書を作成することを通じて、時間管理能力を身につける
第 5 週（2 コマ） (2/ 8)	最終プレゼンテーションとプロジェクト計画書のブラッシュアップ ● 第 2 週での担当教員からのアドバイスを踏まえてプレゼンテーションを改善する ● 第 3、4 週での教員からのアドバイスを踏まえて計画書を改善する

6. 実施状況

（1）プレゼンテーション

プレゼンテーションに関する技法の基礎講義を元に、自らのプロジェクトのプレゼンテーションを準備し、発表（10 分）をおこなった。

学生のプロジェクトテーマ：

「The reconsidertation of the Ecomuseum foundation methdology through practice in Sapporo, Hokkaido」

「Non-Hermition effects in classical drift diffusion phenomena」

「低レベル放射性廃棄物の処理方法について」

「ニホンウズラにおける SOX9 遺伝子高度保存領域が発現制御に与える影響」

教員からのアドバイスに加え、受講生がお互いにアドバイスすることで、異分野の人にも伝わるようにブラッシュアップを行った。2 度のプレゼンテーションを経験し、多くの学生がプレゼン能力を改善し、自分のプロジェクトを明確に伝える力を高められたと考える。さらに、異なる分野の研究を理解しようとする「聞く能力」に磨きをかけたことにより、広い視野で考えられるようになり、自身の研究を多方面から見る力がついたと考えている。

（2）プロジェクト計画書

プロジェクト計画書の書き方の基礎講義を元に、日本学術振興会（JSPS）特別研究員と北海道大学 DX 博士人材フェローシップの申請書を用いて、自らのプロジェクトの計画書を作成した。教員からのアドバイスをもとに 2 度のブラッシュアップをおこなった。自身のプロジェクトの詳細を言語化し、それを通じてプロジェクトのビジョンを明確化させる力が向上したと考える。

7. 受講者および成績

受講者：4 名

成績：

8. その他

- 受講者の内 2 名が日本学術振興会（JSPS）特別研究員と北海道大学 DX 博士人材フェローシップに応募予定。
- 受講者の内 1 名が海外でのドクター進学希望。

秋・冬ターム「大学院特別演習：ソーシャル・イノベーション」実施状況

1. 実施日時

期間　　：2022 年 11/12（土）～2023 年 2/4（土）
回数　　：全 4 回（すべて土曜日開講）
場所　　：高等教育推進機構 S 講義棟 S5 教室

2. 実施体制

科目責任者　　：島田和久（高等教育推進機構）
授業担当教員　：島田和久（高等教育推進機構）

3. 授業目的・目標

（1）授業目的

現代社会の複雑化した課題に対し、これを解決するために既存の枠にとらわれない斬新な視点での取り組み、ソーシャル・イノベーションが求められている。ソーシャル・イノベーションの取り組みは様々な分野でなされ、また、その形態も多岐にわたるが、たとえば、異分野間の協働、デジタル・トランスフォーメーション（DX）の活用による困難の克服などが挙げられる。加えて、これらの斬新な取り組みは、持続可能性（Sustainability）や強靭性（Resilience）に裏打ちされていることも重要である。

この授業では、ソーシャル・イノベーションによって問題解決を図る視点を複数の専門家による事例を交えた講義で解説し、その後、チーム学習によって理解の定着を図る。

（2）授業目標

- ソーシャル・イノベーションの多様な形態と適用領域を習得し、その視点、有効性および重要性が理解できる。
- チーム学習を通して、「3+1 の力」を身に着け、これをソーシャル・イノベーションに適用できる。
- 授業で学んだ内容を契機として、社会の課題に対して独自の視点でソーシャル・イノベーションの提案ができる（チームによるプロジェクト・ワーク）。

4. 評価方法

チーム学習（ディスカッション・プレゼンテーションなど）への貢献：50%、最終プレゼンテーション：30%、授業フィードバック（新渡戸ポートフォリオ：NPF による）：20%

5. 授業内容および実施状況

ソーシャル・イノベーション概論、事例研究（①企業のカーボン・ニュートラルへの取り組み、②住民参加型の地域再生の取り組み、③起業家によるバイオ・ヘルスケア×IT の取り組み）、及びプロジェクト・ワークと発表会

6. 受講者及び成績

受講者：なし（不開講）

秋・冬ターム「大学院特別演習：企業課題解決演習 2022」実施状況

1. 実施日時

期間　　：2022 年 10 月 15 日(土)～12 月 3 日(土)（3rd バッチ）
曜日(時限)　：集中
回数　　：全 5 回（各バッチ）
場所　　：北海道大学フード&メディカルイノベーション国際拠点

2. 実施体制

科目責任者　　：金子純一（大学院工学研究院）
　　新渡戸カレッジ：繁富香織（高等教育推進機構）

3. 授業目的・目標

（1）授業目的

本授業は、フィンランド発祥の DEMOLA の教育プログラムを活用して、アントレプレナーシップ/イントレプレナーシップの思考・行動アプローチを実践的に学び、体得することをめざすプログラムである。学生は、2 ヶ月間、フード＆メディカル国際拠点で開催されるオープンイノベーション手法のワークを受けながら、学生と企業人で構成するチームの一員として、企業が抱えるビジネス上の課題の解決モデルを組み立てる。

（2）授業目標

- DEMOLA プログラムへの参加を通して、ビジネスモデルの設計・具体化・検証のサイクルを学び、その加速化によって、イノベーションを起こすために求められる思考と行動の習慣を身につける。
- 実際の企業の課題を解決に導く、精度の高いビジネスアイディアを立案するアプローチを学ぶ。
- 企業の課題が根ざしている社会的な構造と、世界的規模で直面する未来のトレンドを理解し、よりインパクトの大きいビジネスモデルに磨きあげるメソッドを体得する。
- 知的財産権の価値に気づき、管理・運用するスキルを学ぶ。

4. 評価方法

授業への参加・貢献度（発表・ディスカッション等）：40%、課題提出（プラン最終版）：30%、最終プレゼンテーション：30%

5. 授業内容及び実施状況

本タームの参加企業：5 社（3rd バッチ）（7. 参考資料参照）
学生の参加者（3rd バッチ）：30 名
学生と企業人でチームを構成し、企業が抱えるビジネス上の課題解決の提案と、参加企業の前での最終プレゼンを行った提案されたアイディアを課題提出企業が採用し、ライセンス契約をするケースもあった（本年度 3rd バッチまでのライセンス契約の累積、31/42 課題）。

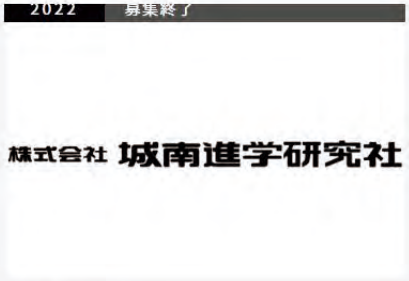
6. 受講者及び成績

受講者：なし

7. 参考資料

3rd バッチ参加企業と課題

2023_1st Batch Coming soon



学びの多様性

函館「第二の開国」プロジェクト
函館をスタートアップの聖地に！

ジェンダード・イノベーションズを始めよう。

テクノロジーサーキュレーション

超難問「“グリーンパークほどの”を活かし尽くせ。」

秋・冬ターム「大学院特別演習：Hult Prize チャレンジ」実施状況

1. 実施日時

期間　　：２学期集中（10 月～11 月）

2. 実施体制

担当教員　　：繁富香織（高等教育推進機構）

3. 授業目的・目標

（1）授業目的

ハルトプライズ（Hult Prize）は、SDGs などの社会的課題を解決するための起業アイディアを争う国際的な学生コンペティションであり、数名からなる学生チームが毎年提示される課題に挑戦している。例年、10月頃にクリントン元アメリカ大統領によって課題が提示され、キャンパスや地域での予選会とそれに関わる各種セミナーやワークショップ、プログラムへの参加を経て、翌年 9月頃開催の世界大会で優勝チームが決定する。優勝チームには起業資金として 1 万ドルが与えられる。この演習授業では、ハルトプライズへの挑戦（ハルトプライズへのエントリー；チームによるプロジェクト立案と発表、各種イベントへの参加）を通じて、新渡戸カレッジが育成するリーダー人材の中で、特に「チェンジリーダー」になるための実践的取り組みを学ぶ。また、SDGs、ソーシャルビジネス、起業家精神への理解を深めるとともに、社会にインパクトを与えるプロジェクト構想の立案方法を体得する。

（2）授業目標

- ハルトプライズ北海道大学キャンパス大会に参加し、課題への取り組みと起業アイディアの立案、関連セミナーへの参加を通じて、現代社会の問題に対する高度な共通認識を持ち、その解決に向けたチームでの取り組み方法を習得する。
- 課題解決に求められる革新的なアイデアを創出し、それをビジネスとして具体的に立案する方法を身につける。
- 説得力のあるプレゼンテーションスキルを習得する。
- ソーシャルビジネスについて理解するとともに、起業家精神を身につける。

4. 評価方法

Hult Prize に関する講義やイベントへの積極的な参加及び最終レポートにより評価を行う。また、新渡戸カレッジ大学院教育コースにて開講する「大学院特別演習」としての単位修得には以下の 3 つの条件を満たすことが必要である。

(1) 自分の属するチームがハルトプライズ学内予選に出場すること
(2) 学内予選時で発表したスライド資料および Hult Prize 参加証明書のコピーを提出すること
(3) 最終レポートを提出すること

5. 授業内容

- 北海道大学ハルトプライズは、学生からなる運営チームにより、下記の内容で実施された。
- 今年度のハルトプライズテー、ハルトプライズ・チャレンジに関連する SDGs への理解
- ソーシャルアントレプレナー(起業家)とは
- ビジネス構想演習
- 英語プレゼンテーション演習
- ハルトプライズ学内選抜大会（全員参加）
- チェンジリーダーについて
- 振り返りと次へのアクション

2022/2023 年のテーマ「Redesigning Fashion」：ファッション業界で革新的な社会的企業を立ち上げ、持続可能なものにすること。受講者の学内予選におけるプレゼンタイトルと内容は以下の通り。

「Green & Slow Fashion」

服を修理し、より長く着用できる服を作ることを目的としたブランドをデザインする。

6. 受講者及び成績

受講者：1 名

成績：

7. 参加者

コンペ参加者：1 名（オナーズプログラム）、1 名（修了生：キャンパス大会優勝チーム所属）（9. 参考資料参照）

運営スタッフ；1 名（オナーズプログラム）

8. その他

ハルトプライズのイベントにおいて、新渡戸カレッジメンター黒田垂歩と新渡戸スクール・カレッジ修了生数名が講演を行った。さらに、ハルトプライズ学内選抜大会において、新渡戸スクール修了生の針ヶ谷元基氏（現：JETRO）が審査員の一人として加わり大会を支援した。

9. 参考資料

優勝者の写真（前列左：新渡戸カレッジ修了生）

北大時報　令和４年６月号

全学ニュース

令和4年度新渡戸カレッジ入校式を開催

5月14日（土）、新渡戸カレッジ入校式を高等教育推進機構にて執り行いました。

N1講義室において大学院教育コース入校式が行われ、寳金清博校長（北海道大学総長）による挨拶の後、新渡戸カレッジ関係教員・メンターの紹介が行われ、メンターを代表してラワンカル・アビジートさんの挨拶がありました。その後、修了生代表として鈴木宙也さん、入校生代表として山﨑美空さんの挨拶が行われました。同日に入校時オリエンテーションと授業も行われました。

続いて、大講堂において学部教育コース入校式が行われ、寳金校長による挨拶の後、フェローを代表して石川めぐみさんによる挨拶がありました。修了生代表の荒　幹彦さん、及び在校生代表の中山芽生さんからの祝辞が披露された後、入校生を代表して平山　薫さんが挨拶を行いました。その後、昨年度に優れた活動を行った学生4名に対し、新渡戸カレッジ奨励賞授与の表彰式が行われ、最後に令和3年度新渡戸学（フェローゼミ）公開シンポジウム学生大賞ゼミ（廣重ゼミ）の成果発表が行われ、式は無事に終了しました。

（学務部教育推進課）

令和4年度5月新渡戸カレッジ入校者一覧

プログラム	コース	入校生数
基礎プログラム	学部教育コース	278
	大学院教育コース	49
オナーズプログラム	学部教育コース	136
	大学院教育コース	11

寳金校長の挨拶

入校生代表　山﨑さんの挨拶

石川フェローの挨拶

入校生代表　平山さんの挨拶

北大時報　令和４年７月号

全学ニュース

第14回（令和4年度第1回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、6月18日（土）に高等教育推進機構において、第14回メンターフォーラムを開催しました。

社会の多様な分野で活躍する方々がメンターに就任し、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部として講演会を行い、『キャリアパスを考える』のテーマで、7名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンターに自由に質問し対話を行う交流会として実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ることができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）

講演会様子（左：中島　徹メンター、右：集合写真）

交流会におけるメンターとの対話の様子

北大時報　令和４年９月号

全学ニュース

北海道大学栄誉賞を數土文夫氏に授与

8月5日（金）、工学研究院フロンティア応用科学研究棟レクチャーホール（鈴木章ホール）において、JFEホールディングス株式会社名誉顧問である數土文夫氏に対する北海道大学栄誉賞授与式が執り行われました。

北海道大学栄誉賞は、本学を卒業、もしくは修了した者または本学の職員であった者のうち、学術、文化もしくは、スポーツの分野または社会活動において顕著な功績のあった者を表彰する制度であり、平成15年11月に創設されました。受賞者は、これまで昭和31年に獣医学部を卒業したプロスキーヤーである三浦雄一郎氏1名であり、今回の授与により受賞者は2名となります。

數土氏は、昭和39年に工学部を卒業し、長年にわたり鉄鋼業をはじめ、公共放送及び電力事業等様々な業界の経営に多大なる貢献をされております。また、本学においては、経営協議会委員、連合同窓会会長及び新渡戸カレッジ副校長を務められ、本学の経営及び教育研究の発展にもご尽力いただいております。

授与式では、寳金清博総長から數土氏に栄誉賞（楯）の授与と記念品が贈呈され、引き続き、數土氏による「伝統と継承―君子は義に喩り小人は利に喩る―」と題した講演が行われ、100名を超える出席者は熱心に聴講しました。

（総務企画部総務課）

左から數土氏、寳金総長

北大時報　令和４年12月号

全学ニュース

寳金総長が新渡戸カレッジで特別講演会を実施

新渡戸カレッジでは、11月2日（水）に高等教育推進機構において、寳金清博総長・新渡戸カレッジ校長の講演会を開催しました。寳金総長は「Introduction of the President of Nitobe College and Hokkaido University」と「University and Society」について、英語で講演されました。

講演会には、基礎プログラム学部教育コースの学生を中心にオナーズプログラム生や教職員などが多数、参加しました。

講演は、ご自身の趣味や特技、学生時代に打ち込んだスポーツ等の貴重な体験について、ユーモアを交えながら始まり、やや緊張気味だった会場の雰囲気を徐々に和らげていき、本題である「University and Society」へと進んでいきました。

「University and Society」では、古代ギリシャの町は教育を中心に発展し、教育の中心にある大学が社会の基本的な要素であり、言い換えれば、よい国や地域は優れた大学や教育機関を擁していると話されました。

このような社会の発展と大学の関係を紹介しながら、話は本学の歴史に関することから将来についての話題となり、「Hokudai Vision 2030」と題した未来計画についても披露されました。まさにタイムリーな話題だけに、学生のみならず教職員も興味を引く内容であったため、参加者はスクリーンに映し出されるダイナミックな戦略に見入っていました。

質疑応答ではたくさんの学生が質問に立ちました。

講演会が終了した後も、総長の元には個別に質問をしようと長い列ができ、その一人一人に対して、丁寧に答えていた総長の姿が印象的でした。

（学務部教育推進課）

講演会場の様子

北大時報　令和５年１月号

全学ニュース

第15回（令和4年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、12月17日（土）に高等教育推進機構において、第15回メンターフォーラムを開催しました。

社会の多様な分野で活躍する方々がメンターに就任し、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部として講演会を行い、『キャリアパスを考える』のテーマで、6名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンターに自由に質問し対話を行う交流会として実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ることができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）

講演会様子（左：藤井メンター、右：集合写真）

交流会におけるメンターとの対話の様子

北大時報　令和５年２月号

全学ニュース

新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

新渡戸カレッジ学部教育コースでは、12月10日（土）高等教育推進機構大講堂において、「新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会」を開催しました。本シンポジウムの目的は、新渡戸学（フェローゼミ）及び新渡戸学（アドバンストゼミ）の成果報告及び意見交換を通して、学び得た知識を共有するというものです。当日は対面で行うとともにライブ配信も行い、会場参加が難しい方や高大連携の高校生にも視聴の機会を設けました。

新渡戸学（フェローゼミ）は、北大同窓生の新渡戸カレッジフェローが指導する少人数の演習形式の科目として、新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コースの学生を対象とした必修科目に位置付けられています。今年度は10月1日（土）から始まり、現地視察を含めた全5回のゼミが全て対面で実施されました。新渡戸学（アドバンストゼミ）はオナーズプログラム学部教育コースの学生を対象とした少人数演習形式の科目で、9月1日（木）に開始し、フェローや関係者と共に実施した十勝への合宿等を中心に、グループ活動に取り組んできました。フェローゼミ、アドバンストゼミ共に、新渡戸カレッジ生の上級生がチューターとしてゼミ生をサポートし、先輩、後輩のつながりを築いていることが特徴の一つとなっています。

本シンポジウムには各ゼミテーマの関係者にも出席いただき、新渡戸カレッジ校長代理の山口淳二理事・副学長からの挨拶の後、フェローゼミから7つの代表グループ、アドバンストゼミから一つのグループによる発表が行われました。今年度は各ゼミの発表時間を15分、Slido※1を利用した質疑応答を8分と昨年より長く設定しており、これまでにも増して、熱意にあふれ、質疑応答が活発であったとの感想が聞かれました。また、各ゼミの発表の他に、オナーズプログラムや学生企画行事の紹介時間が設けられ、実際に参加している学生からの体験談等が報告されました。すべての発表の後、フェローゼミ統括の多田幸雄フェロー並びにコアチューターとしてゼミをサポートしてきた理学院博士後期課程2年川谷維摩さんから講評をいただき、その後、フェローゼミ履修生の投票による学生大賞の結果が発表され、本年度のシンポジウムを終了しました。

最後になりましたが、フェローゼミ及びアドバンストゼミをご指導いただいた各フェロー及び支援教員、ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

※1：イベント等でQ＆Aなど参加者との双方向コミュニケーションに役立つ機能を提供しているWebサービス

（学務部教育推進課新渡戸カレッジ推進事務室）

会場全体の様子

発表の様子

来場者全員での記念撮影

北大時報　令和５年４月号

全学ニュース

新渡戸カレッジ修了式（大学院教育コース）を挙行

令和4年度新渡戸カレッジ修了式（大学院教育コース）を3月20日（月）に高等教育推進機構にて執り行いました。

基礎プログラムから、留学生20名を含む26名、オナーズプログラムから、留学生6名を含む22名が修了しました。はじめに、弛　和順副校長から修了生代表の2名に修了証書が授与されました。また、オナーズプログラム修了生にはアソシエイト（大学院）の称号を授与するとともに、特に優秀と認められた2名に対し、優秀賞を授与しました。

続いて、弛副校長から挨拶が行われ、「グローバル化の進む社会で逞しく生き抜き、そして社会に貢献するためには、これまでの時代よりも一層多くの能力が求められる」ことに触れ、基礎プログラム修了生に対しては、「オナーズプログラム入校の上、修得した知識やスキルの応用と発展をめざしてください」との激励の言葉が贈られ、またオナーズプログラム修了生に対しては「高度な専門性とそれらを「活かす力」を存分に発揮して、グローバル化社会において自らの道を切り拓くと共に、国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材となることを心より祈念いたします」との期待の言葉が贈られました。

修了生代表の挨拶として、オナーズプログラム代表の李　慈慧さんが、新渡戸カレッジで学んだ経験や今後の抱負などについて挨拶を行い、修了式は終了となりました。

（優秀賞受賞者）
李　慈慧（国際広報メディア・観光学院）
イマン　フセイン　エルサエド　トゥリアバ（工学院）

（学務部教育推進課）

基礎プログラム修了生代表　シェリーンさん

オナーズプログラム修了生、優秀賞表彰代表
イマン　フセイン　エルサエド　トゥリアバさん

オナーズプログラム修了生、優秀賞表彰代表　李　慈慧さん

北大時報　令和５年５月号

全学ニュース

令和4年度新渡戸カレッジ修了式（学部教育コース）を挙行

令和4年度新渡戸カレッジ修了式（学部教育コース）を3月23日（木）に高等教育推進機構のN1教室にて挙行しました。修了式には修了生30名のうち16名が出席し、寳金清博校長（総長）、山口淳二校長代理（理事・副学長）、弛　和順副校長、杉江和男副校長及び新渡戸カレッジ関係教職員の祝福を受けました。

式では、修了生を代表して、水産学部海洋生物科学科卒業の二通健太さんに寳金校長から修了証書が授与されました。次に寳金校長が挨拶を行い、挨拶のなかで、寳金校長は所属学部と新渡戸カレッジ両方のカリキュラムを修了した学生たちの努力を労い、各自がこの経験をこれからの人生に生かし、グローバルリーダーとして活躍することを期待すると激励しました。修了生代表の挨拶では、水産学部海洋資源科学科卒業の北村もあなさんが、新渡戸カレッジで学んだ経験や今後の抱負を述べました。さらに校友会エルム会長で新渡戸カレッジ副校長でもある杉江氏と新渡戸カレッジフェローの佐々木亮子氏から激励の言葉が修了生に贈られました。この後、式は滞りなく進み、無事に終了しました。

終了後、出席者全員で記念写真を撮り、またお世話になった教職員と写真を撮る姿があちこちで見られ、皆名残惜しそうに会場を去って行きました。

（学務部教育推進課）

修了証書の授与

寳金校長の挨拶

修了生代表による挨拶

出席者全員での記念撮影

8　新渡戸カレッジ　入校者・修了者・在籍者の数

（1）基礎プログラム学部教育コース（仮入校者数、正式入校者数、修了者数）

令和４年度		仮入校（令和４年４月）			正式入校（令和４年10月）			修了（令和５年３月）		
		１年次	２年次	計	１年次	２年次	計	１年次	２年次	計
		249	29	278	178	14	192	158	14	172
内訳	総合文系	10	―	10	8	―	8	8	―	8
	総合理系	69	―	69	45	―	45	41	―	41
	文学部	23	5	28	19	3	22	17	3	20
	教育学部	6	0	6	3	0	3	3	0	3
	法学部	22	4	26	17	1	18	15	1	16
	経済学部	24	2	26	16	1	17	13	1	14
	理学部	8	2	10	7	1	8	6	1	7
	医学部医学科	8	0	8	6	0	6	5	0	5
	医学部保健学科	6	1	7	5	1	6	3	1	4
	歯学部	2	0	2	1	0	1	1	0	1
	薬学部	1	1	2	0	0	0	0	0	0
	工学部	33	4	37	24	2	26	21	2	23
	農学部	13	4	17	10	4	14	9	4	13
	獣医学部	6	0	6	3	0	3	3	0	3
	水産学部	18	6	24	14	1	15	13	1	14

（2）オナーズプログラム学部教育コース（入校者数、修了者数）

①入校者数

令和４年度		２年次	３年次	計
		122	14	136
内訳	文学部	15	1	16
	教育学部	2	1	3
	法学部	9	1	10
	経済学部	13	3	16
	理学部	8	2	10
	医学部医学科	7	0	7
	医学部保健学科	2	0	2
	歯学部	1	0	1
	薬学部	0	0	0
	工学部	33	4	37
	農学部	19	1	20
	獣医学部	2	0	2
	水産学部	11	1	12
	現代日本学プログラム	0	0	0

②修了者数

		最終学年在籍者	修了者
		60	30
内訳	文学部	1	0
	教育学部	1	0
	法学部	2	1
	経済学部	3	0
	理学部	9	3
	医学部医学科	5	4
	医学部保健学科	1	1
	歯学部	0	0
	薬学部	1	1
	工学部	21	7
	農学部	13	10
	獣医学部	0	0
	水産学部	3	3

称号授与者数	
Summa cum Laude （通算 GPA 上位 15%以内 TOEFL-iBT100 点相当以上）	3
Magna cum Laude （通算 GPA 上位 30%以内 TOEFL-iBT90 点相当以上）	9
Cum Laude （通算 GPA 上位 50%以内 TOEFL-iBT80 点相当以上）	3
Associate （上記以外）	15

（3）基礎プログラム大学院教育コース（入校者数、修了者数）

①令和 4 年 4 月入校者数及び令和 4 年 9 月修了者数

		4 月入校者数	9 月修了者数	未修了者数
		49	47	2
内訳	文学院	0	0	0
	法学研究科	0	0	0
	経済学院	2	2	0
	教育学院	1	1	0
	国際広報メディア・観光学院	4	4	0
	公共政策学教育部	2	1	1
	医学院	0	0	0
	保健科学院	3	3	0
	情報科学院	1	1	0
	工学院	7	7	0
	総合化学院	3	3	0
	医理工学院	0	0	0
	農学院	8	8	0
	水産科学院	0	0	0
	環境科学院	2	2	0
	国際食資源学院	4	4	0
	理学院	4	4	0
	生命科学院	8	7	1

②令和４年10月入校者数及び令和５年３月修了者数

		10月入校者数	3月修了者数	未修了者数
		28	26	2
内訳	文学院	1	1	0
	法学研究科	0	0	0
	経済学院	5	5	0
	教育学院	0	0	0
	国際広報メディア・観光学院	4	4	0
	公共政策学教育部	1	1	0
	医学院	0	0	0
	保健科学院	1	1	0
	情報科学院	1	1	0
	工学院	8	8	0
	総合化学院	0	0	0
	医理工学院	0	0	0
	農学院	0	0	0
	水産科学院	0	0	0
	環境科学院	1	1	0
	国際食資源学院	0	0	0
	理学院	1	1	0
	生命科学院	5	3	2

（4）オナーズプログラム大学院教育コース（入校者数、修了者数）

①令和４年４月入校者数及び令和４年９月修了者数

		４月 入校者数	履修継 続者数	９月 修了者数	履修継 続者数	未修了 者数
		11	2	10	2	1
内訳	文学院	1	0	0	1	0
	法学研究科	0	0	0	0	0
	経済学院	0	0	0	0	0
	教育学院	0	0	0	0	0
	国際広報メディア・観光学院	0	0	0	0	0
	公共政策学教育部	4	0	3	1	0
	医学院	1	0	1	0	0
	保健科学院	0	0	0	0	0
	情報科学院	1	0	1	0	0
	工学院	3	0	2	0	1
	総合化学院	0	1	1	0	0
	医理工学院	0	0	0	0	0
	農学院	0	1	1	0	0
	水産科学院	0	0	0	0	0
	環境科学院	0	0	0	0	0
	国際食資源学院	0	0	0	0	0
	理学院	0	0	0	0	0
	生命科学院	1	0	1	0	0

②令和４年10月入校者数及び令和５年３月修了者数

		10月 入校者数	履修 継続者数	3月 修了者数	履修 継続者数	未修了 者数
		21	2	22	1	0
内訳	文学院	0	1	1	0	0
	法学研究科	0	0	0	0	0
	経済学院	2	0	1	1	0
	教育学院	0	0	0	0	0
	国際広報メディア・観光学院	1	0	1	0	0
	公共政策学教育部	1	1	2	0	0
	医学院	0	0	0	0	0
	保健科学院	1	0	1	0	0
	情報科学院	0	0	0	0	0
	工学院	3	0	3	0	0
	総合化学院	2	0	2	0	0
	医理工学院	0	0	0	0	0
	農学院	4	0	4	0	0
	水産科学院	0	0	0	0	0
	環境科学院	1	0	1	0	0
	国際食資源学院	1	0	1	0	0
	理学院	1	0	1	0	0
	生命科学院	4	0	4	0	0

（5）在籍者数

①学部教育コース（基礎Ｐ仮入校：１年次、２年次の一部）在籍者数

令和４年４月現在

	１年次	２年次	３年次	４年次	５年次	６年次	計
総合文系	10	―	―	―	―	―	10
総合理系	69	―	―	―	―	―	69
文学部	23	20	13	1	―	―	57
教育学部	6	2	6	1	―	―	15
法学部	22	13	17	2	―	―	54
経済学部	24	15	6	3	―	―	48
理学部	8	10	10	9	―	―	37
医学部医学科	8	7	1	1	2	4	23
医学部保健学科	6	3	5	2	―	―	16
歯学部	2	1	3	1	2	0	9
薬学部	1	1	2	1	0	1	6
工学部	33	38	26	21	―	―	118
農学部	13	23	10	13	―	―	59
獣医学部	6	2	3	2	1	0	14
水産学部	18	17	4	3	―	―	42
現代日本学 プログラム課程	0	0	0	0	―	―	0
合計	249	152	106	60	5	5	577

学部教育コース（(基礎Ｐ正式入校：1年次、2年次の一部）在籍者数　令和4年10月現在

	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計
総合文系	8	―	―	―	―	―	8
総合理系	45	―	―	―	―	―	45
文学部	19	18	13	1	―	―	51
教育学部	3	2	6	1	―	―	12
法学部	17	10	17	2	―	―	46
経済学部	16	14	6	3	―	―	39
理学部	7	9	10	9	―	―	35
医学部医学科	6	7	1	1	2	4	21
医学部保健学科	5	3	5	2	―	―	15
歯学部	1	1	3	1	2	0	8
薬学部	0	0	2	1	0	1	4
工学部	24	36	26	21	―	―	107
農学部	10	23	10	13	―	―	56
獣医学部	3	2	3	2	1	0	11
水産学部	14	12	4	3	―	―	33
現代日本学プログラム課程	0	0	0	0	―	―	0
合計	178	137	106	60	5	5	491

②大学院教育コース在籍者数

	令和4年4月現在			令和4年10月現在		
	修士1年 専門1年	修士2年 専門2年	計	修士1年 専門1年	修士2年 専門2年	計
文学院	1	0	1	2	0	2
法学研究科	0	0	0	0	0	0
経済学院	2	0	2	6	1	7
教育学院	1	0	1	0	0	0
国際広報メディア・観光学院	3	1	4	4	1	5
公共政策学教育部	2	4	6	2	1	3
医学院	0	1	1	0	0	0
保健科学院	3	0	3	2	0	2
情報科学院	2	0	2	1	0	1
工学院	8	2	10	10	1	11
総合化学院	2	2	4	1	1	2
医理工学院	0	0	0	0	0	0
農学院	7	2	9	4	0	4
水産科学院	0	0	0	0	0	0
環境科学院	2	0	2	2	0	2
国際食資源学院	3	1	4	0	1	1
理学院	3	1	4	2	0	2
生命科学院	7	2	9	7	2	9
合計	46	16	62	43	8	51

9　新渡戸カレッジ修了者の主な就職先

【一般企業】
日本 IBM、パナソニック、清水建設、竹中工務店、日立造船、三菱電機、本田技研工業、DIC、ベネッセコーポレーション、中外製薬、時事通信社、朝日新聞社、アクセンチュア、NTT、デンソー、ニトリ、IHI、KDDI、イオン、小松製作所、ジョンソン・エンド・ジョンソン、ソニー、北海道新聞社、みずほファイナンシャルグループ、三菱商事、参天製薬、資生堂、双日、電通、富士通、日産自動車、日本たばこ産業　他

【官公庁】
経済産業省、厚生労働省、環境省、法務省、警察庁、気象庁、北海道庁、北海道立総合研究機構、東京都庁、札幌市役所、名古屋市役所　他

【大学】
北海道大学、Jahangirnagar University（バングラデシュ）他

【進学】
北海道大学大学院、東京大学大学院、京都大学大学院、TexasA & M University 大学院（米国）、Wageningen University 大学院（オランダ）、Swedish University for Agriculture Sciences 大学院（スウェーデン）　他

10　新渡戸カレッジ奨学金支給状況一覧（令和４年度）

（1）新渡戸カレッジ（海外留学）奨学金（北海道大学フロンティア基金）

①オナーズプログラム　学部教育コース　（単位：円）

令和４年度（2022年度）	給付人数（人）					給付額（円）			
プログラム名等	JASSO	カレッジ奨学金	（校友会支援）	合計延べ数	合計実数	JASSO	カレッジ奨学金	校友会支援	合計
短期留学スペシャルプログラム	0	0	―	0	0	0	0	―	0
国際インターンシップ	―	11	11	22	11	0	1,000,000	880,000	1,880,000
学部レベル短期留学	2	2	―	4	2	130,000	119,500	―	249,500
交換留学	8	10	―	18	10	3,000,000	3,531,000	―	6,531,000
計	10	23	11	44	23	3,130,000	4,650,500	0	8,660,500
						新渡戸カレッジ奨学金　合計給付額			4,650,500

②オナーズプログラム　大学院教育コース　（単位：円）

令和４年度（2022年度）	給付人数（人）					給付額（円）			
プログラム名等	JASSO	カレッジ奨学金	（校友会支援）	合計延べ数	合計実数	JASSO	カレッジ奨学金	校友会支援	合計
短期留学スペシャルプログラム	0	0	―	0	0	0	0	―	0
国際インターンシップ	―	0	0	0	0	0	0	0	0
大学院レベル短期留学	0	0	―	0	0	0	0	―	0
交換留学	0	1	―	1	1	0	240,000	―	240,000
計	0	1	0	1	1	0	240,000	0	240,000
						新渡戸カレッジ奨学金　合計給付額			240,000

（2）新渡戸カレッジオナーズプログラム大学院教育コース奨学金（北海道大学フロンティア基金）

（単位：円）

令和４年度（2022年度）	給付人数（人）	１名あたりの給付額（円）	給付額合計
第１学期	8	200,000	1,600,000
第２学期	16	200,000	3,200,000
計	24		4,800,000

令和４年度（2022年度）	奨学金受給者の所属大学院
第１学期	文学院１名　公共政策学教育部４名　医学院１名　工学院２名
第２学期	経済学院１名　国際広報メディア・観光学院１名　公共政策学教育部１名　工学院２名 総合化学院２名　農学院４名　環境科学院１名　国際食資源学院１名　生命科学院３名

11　新渡戸カレッジ留学の状況（2022 年度）

新渡戸カレッジにおける海外留学の目的

北海道大学の「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」および「実学の重視」という 4 つの基本理念と新渡戸稲造の精神に基づき、海外において高い倫理観と豊かな人間性をもった自律的な個人の確立と、論理的な思考力と高い専門能力を身につけることを海外留学の目的とする。

海外留学のポリシー

海外留学は、学生が自律的に学び、研究する上での手段である。学生個々人が国際的な視野の中で、何を学び、何を研究するかを熟考し、海外留学の目標と計画を設定した上で渡航することを求める。

新渡戸カレッジの海外留学制度

新渡戸カレッジオナーズプログラムの修了には、海外留学の単位取得は必須となる。単位取得の対象となるのは、交換留学プログラム（2 単位）と短期留学プログラム（1 単位）があり、後者には、「短期留学スペシャルプログラム」、「学部専門レベル短期留学」、および「国際インターンシップ」の 3 つがある。新渡戸カレッジオナーズプログラムに在籍する学生は、参加するプログラムのタイプ（交換留学・短期留学）に合わせて、奨学金が支給される。

【2022 年度海外留学の参加状況】

留学の種類	渡航先		人数
交換留学	オーフス大学、ブレーメン大学、パリ政治学院、レンヌ政治学院、ヘルシンキ大学、アールト大学、アムステルダム自由大学、サセックス大学、アラスカ大学フェアバンクス校、ワシントン大学、オレゴン大学、ブリティッシュコロンビア大学		12 名
短期留学	短期留学スペシャルプログラム（オンライン）	アラスカ大学フェアバンクス校、オレゴン州立大学、ブリティッシュコロンビア大学、ワシントン大学	11 名
	国際インターンシップ	シンガポール、ベトナム、タイ、バングラデシュ、マレーシア、アメリカ（春季派遣予定）	12 名（4）
	学部専門レベル短期留学	カンボジア、タイ、ザンビア共和国（春季派遣予定）	4 名（1）

短期留学スペシャルプログラム（オンライン）の様子

12　新渡戸カレッジ FD 報告

教員対象研修（FD）：プロジェクトマネジメント実施計画　2022
Faculty Development (FD):

研究と教育に役に立つプロジェクトマネージメントスキル
Applying project management skills in research and education

1. 概要 (Outline)

本FDセミナーでは、北海道大学の教職員と新渡戸カレッジ大学院コースの教員がともに、PMBOK（Project Management Body of Knowledge）を用いてプロジェクトマネジメント（PM）とその教育・研究活動への応用について学びます。PMBOKは、PMに関するノウハウや手法を体系立ててまとめたものであり、現在PMの世界標準として多くの国に浸透しています。本セミナーを通じて参加者は、分野横断型研究のような大規模プロジェクトの管理において、より適切な計画立案やよりスムーズなチームファシリテーションが可能になります。一方、これらのPMスキルは、単独あるいは少人数で行うプロジェクトや中長期の業務遂行においても高い効果を発揮します。関与するプロジェクトの大小に関わらず全ての教職員に有用なスキルといえます。多くの方の参加を歓迎します。

In this Faculty Development Seminar, Hokkaido University faculty and instructors for Nitobe College for Graduate Students will study both Project Management (PM) and its application to educational and research activities using PMBOK (Project Management Body of Knowledge). PMBOK is a systematic compilation of knowledge and skills related to PM and it is currently pervading all over the world as a global standard for PM. In doing so, participants will become able to more adequately plan logistics for their various projects
, formulate more accurate timeframes for project completion, and better facilitate interactions in team projects. On the other hand, these PM skills are also highly effective for projects that are carried out alone or with a small number of people, and for medium- to long-term business execution. It is a useful skill for all faculty and staff, regardless of the size of the project involved. We welcome the participation of many people.

2. 実施日時・場所 Schedule/Venue

2022年 6月4日(土)　13:00～17:00　June 4, 2022 (Saturday)
場所：フード＆メディカルイノベーション（FMI）国際拠点　2F
Venue: Global Research Center for Food and Medical Innovation (FMI)　2F

3. 言語 Language

英語/English

4. 参加者&募集 Participants and Application

授業担当教員 4名、NCG特任教員2名、NCG TA（博士課程学生）5名
学内公開（北海道大学教職員）20名程度募集（高等教育研修センター共催）
Open to faculties and staffs of Hokkaido University (Total: 20 Persons) (Held in conjunction with Center for Teaching and Learning)

5. 実施内容　Content

講師: King To Chu 氏（Project Management Institute (PMI) 認定講師、一般社団法人PMI日本支部 所属）
Lecturer: King To Chu (PMI Certified Lecturer)

事前学習 Preparatory Learning

主なPMに関連する学習資料を事前に動画（8本、各動画の長さは約10～12分）と冊子を提供し、参加者にはワークショップ前に動画を視聴し内容をよく理解してもらう。
Study materials related to the main PMs will be provided in advance in the form of videos (8 videos, each approximately 10-12 minutes in length) and study booklet. Participants will be asked to watch the videos and familiarize themselves with the content before the workshop.

ワークショップ 13:00〜17:00　Workshop 13:00~17:00
各項目に対して講師である King 氏よるショートレクチャー、その後グループワークを行い、King 氏よりフィードバックを受ける。
For each part of the workshop, Mr. King will provide a short lecture followed by group work during which participants will receive feedback from Mr. King.

プログラム：
1. プロジェクトの立ち上げ（プロジェクトビジョンとプロジェクト憲章の策定）
2. スコープ計画
3. ステークホルダーマネジメント（アイデンティフィケーションとマッピング）
4. WBS とスケジューリング作業
5. リスク管理

Program:
1. Initiating a Project (putting together project vision and project charter)
2. Scope planning
3. Stakeholder management (identification and mapping)
4. WBS and scheduling work
5. Risk Management

6. 実施組織
共催：
新渡戸カレッジ
高等教育研修センター（担当：マズル先生）

協力：
産学・地域協働推進機構　（担当：杉村様）

7. その他
King氏は前日に情報科学研究院での講義のため北大に来られている。そこで、情報の事務と話し合い交通費は情報科学研究院との折半とする。（情報科学研究院担当：末岡先生、スバギヨ先生）

北海道大学教職員向け研修会

Faculty Development (FD)

研究と教育に役に立つ プロジェクトマネージメントスキル

Applying project management skills in research and education

概要 (Outline)

本 FD セミナーでは、PMBOK（Project Management Body of Knowledge）を用いてプロジェクトマネジメント（PM）とその教育・研究活動への応用について学びます。本セミナーを通じて参加者は、様々なプロジェクトの管理においてより適切な計画立案やよりスムーズなチームファシリテーションが可能になります。

In this Faculty Development Seminar, you will learn both Project Management (PM) and its application to educational and research activities using PMBOK (Project Management Body of Knowledge). In doing so, participants will become able to more adequately plan logistics for their various projects, formulate more accurate time frames for project completion, and better facilitate interactions in team projects.

実施日時・場所 Schedule / Venue

2022 年 6 月 4 日 (土)　13:00～17:00

June 4, 2022 (Saturday)

場所：フード＆メディカルイノベーション（FMI）国際拠点　2F

Venue: Global Research Center for Food and Medical Innovation (FMI)　2F

Access: Please check website　https://www.fmi.hokudai.ac.jp

言語 Language

英語 /English

講師 Lecturer

King To Chu 氏

(Project Management Institute (PMI) 認定講師、一般社団法人 PMI 日本支部 所属)

対象者　Participants

学内公開（北海道大学教職員）

20 名程度募集

Open to faculties and staffs of Hokkaido University

Total: 20 persons

申し込み Application　https://ctl.high.hokudai.ac.jp/seminar/

Co-Hosted by

Nitobe College

CENTER FOR TEACHING AND LEARNING HOKKAIDO UNIVERSITY

Supported by

北海道大学 産学・地域協働推進機構

13　新渡戸ポートフォリオの活用

新渡戸ポートフォリオ（NPF）とは、学生が自身の学修状況や研究の履歴を記録するオンラインシステムである。新渡戸カレッジにおいて学生が身につける「自分に対する力・他人対する力・社会に対する力・一般倫理」（学部）および「能力更新力・組織形成力・社会還元力・専門職倫理（3+1 の力）」（大学院）の獲得レベルを、NPF 上で自己評価し、今後の学修・研究計画に活かすことが可能となる。学部・大学院で身につける 4 つ能力に加え「活動の記録」（学部）および「専門力」（大学院）を加えた 5 つの項目は、ペンタグラムで可視化されるため、視覚的に自身の成長を把握することができる。さらに、NPF を包括的に使うことで、学生は研究活動や新渡戸カレッジでの学修状況を記録し、振り返ることができるだけでなく、新渡戸カレッジ教員や授業担当教員、修士研究の指導教員もこの記録を閲覧し、NPF 上で適切なアドバイスを与えることができる。

現在の NPF は、大学院教育コースの全学生および学部教育コースの「新渡戸学（セルフキャリア発展ゼミ）」受講者を対象に運用している。今後は学部教育コースの全学生を対象とできるよう、NPF のシステムおよび内容を検討し、改修していく予定である。

図　科目担当教員からみた履修学生の情報

14　新渡戸カレッジ　会議の開催状況

（1）新渡戸カレッジ運営会議議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回（ZOOM会議） 令和4年5月20日（金）	報告事項1	令和4年度新渡戸カレッジ入校者の決定について
	報告事項2	令和4年度新渡戸カレッジの現況について
	報告事項3	令和4年度新渡戸カレッジ入校式について
	報告事項4	令和4年度新渡戸カレッジフェロー交流・研究会メンターについて
	報告事項5	令和4年度新渡戸カレッジ行事予定について
	報告事項6	令和4年度新渡戸カレッジフェロー・メンターについて
	報告事項7	北海道大学新渡戸カレッジ運営会議大学院教育コース教務専門委員会内規の一部改正について
第2回（ZOOM会議） 令和4年9月27日（火）	報告事項1	新渡戸カレッジ教頭の指名について
	報告事項2	令和4年度大学院教育コース修了生（9月修了）の決定について
	報告事項3	令和4年度基礎プログラム学部教育コース正式入校者の決定について
	報告事項4	令和4年度大学院教育コースの修了式（9月修了）及び入校式（秋入校）について
意見交換会（ZOOM会議） 令和4年9月27日（火）	内　容	令和6年度以降の新渡戸カレッジ構想（素案）について
第3回（ZOOM会議） 令和5年2月27日（月）	議　題1	令和4年度新渡戸カレッジ学部教育コース修了予定者及び総代候補者の決定について
	議　題2	令和4年度大学院教育コース修了生の決定について
	議　題3	令和6年度以降の「新渡戸カレッジ」構想（案）について
	報告事項1	令和4年度新渡戸カレッジ修了式等について
	報告事項2	令和4年度北海道大学フロンティア基金各種奨学金の給付状況について
	報告事項3	令和5年度大学院教育コース開講計画について
意見交換会（ZOOM会議） 令和5年2月27日（月）	内　容	今後の新渡戸カレッジについて

（2）学部教育コース教務専門委員会議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回（ZOOM会議） 令和4年5月9日（月）	報告事項1	令和3度新渡戸カレッジ（学部教育コース）修了者について
	報告事項2	令和4年度新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コース仮入校審査の結果について
	報告事項3	令和4年度新渡戸カレッジオナーズプログラム学部教育コース入校審査の結果について
	報告事項4	令和4年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）在籍学生数の状況について
	報告事項5	令和4年新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コース入校式について
	報告事項6	令和4年度新渡戸カレッジフェローの決定について
	報告事項7	令和4年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）関連行事について
第2回（ZOOM会議） 令和4年9月14日（水）	議　題1	令和4年度新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コース正式入校生の選考について
	報告事項1	令和4年度新渡戸カレッジ学部教育コース海外留学みなし単位認定について
	報告事項2	令和4年度新渡戸カレッジ学部教育コースの関連行事について
	報告事項3	令和6年度以降の新渡戸カレッジ構想について

開催年月日	議　題　等	
第3回（ZOOM会議） 令和5年2月20日（月）	報告事項1	令和4年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）修了判定について
	報告事項2	令和4年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）海外留学の単位認定申請（みなし単位）の追加認定について
	報告事項3	新渡戸カレッジ（学部教育コース）の在籍状況について
	報告事項4	新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コースの修了見込について
	報告事項5	令和2年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）修了式について
	報告事項6	令和2年度新渡戸カレッジ（学部教育コース）の関連行事について

（3）大学院教育コース教務専門委員会議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回（ZOOM会議） 令和4年4月28日（木）	議　題1	令和4年度春入校新渡戸カレッジ基礎プログラム大学院教育コース入校者について
	報告事項1	令和4年度新渡戸カレッジ（大学院教育コース）運営体制について
	報告事項2	令和4年度春入校新渡戸カレッジオナーズプログラム大学院教育コース入校者について
	報告事項3	令和4年度新渡戸カレッジメンターの就任について
	報告事項4	令和4年度新渡戸カレッジ入校式（大学院教育コース）について
	報告事項5	令和3年度新渡戸カレッジ（大学院教育コース）の実施状況について
	報告事項6	北海道大学新渡戸カレッジ運営会議大学院教育コース教務専門委員会内規の一部改正について
第2回（ZOOM会議会議） 令和4年9月8日（木）	議　題1	令和4年度基礎プログラムの修了判定（9月修了）について
	議　題2	令和4年度オナーズプログラムの修了判定（9月修了）について
	議　題3	令和4年度秋入校学生募集及び入校者選抜の実施方法について
	報告事項1	令和4年度大学院教育コース（前期）及びFDの実施状況について
	報告事項2	令和4年度新渡戸カレッジ修了式（9月修了）及び入校式（秋入校）について
	報告事項3	令和6年度以降の新渡戸カレッジ構想について
第3回（ZOOM会議） 令和5年2月20日（月）	議　題1	令和4年度基礎プログラムの修了判定（3月修了）について
	議　題2	令和4年度オナーズプログラムの修了判定（3月修了）について
	議　題3	令和5年度開講計画（基礎・オナーズ）について
	議　題4	令和4年度春入校学生募集及び入校者選抜の実施方法について
	議　題5	令和6年度以降の新渡戸カレッジ構想について
	報告事項1	令和4年度大学院教育コースの秋入校の状況について
	報告事項2	令和4年度大学院教育コース（後期）の実施状況について
	報告事項3	令和4年度新渡戸カレッジ修了式（3月修了）について

（4）広報・システム専門委員会議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回（ZOOM会議） 令和4年6月22日（水） （拡大委員会）	議　題1	新渡戸カレッジ運営会議広報・システム専門委員会の各部会について
	議　題2	令和4年度各部会の活動予定について
	報告事項1	令和3年度各部会の活動状況について

(5) 奨学金支援専門委員会議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回（持ち回り） 令和5年2月10日（金） ～2月17日（金）	報告事項1 報告事項2	令和4年度北海道大学フロンティア基金各種奨学金の給付状況について 新渡戸カレッジ海外留学経費支援状況について

(6) 評価委員会議題等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回 令和4年7月7日（木）	協議事項1 協議事項2	評価委員会委員長の選出について 令和4年度以降の新渡戸カレッジ評価活動等について
第2回 令和4年11月1日（火）	協議事項1 報告事項1	新渡戸カレッジ修了生等アンケートの実施について 新渡戸カレッジ（新渡戸スクールを含む）創設時からの沿革・経緯等について
第3回 令和5年2月21日（火）	協議事項1	新渡戸カレッジ修了生等アンケートの実施状況について

(7) 執行部会協議事項等一覧

開催年月日	議　題　等	
第1回 令和4年4月8日（金）	協議事項1 協議事項2 報告事項1 報告事項2 その他	令和4年度の新渡戸カレッジ運営体制について 令和4年度の新渡戸カレッジにおける検討課題等について 令和4年度新渡戸カレッジ行事予定について 令和3年度新渡戸カレッジ各種会議審議事項等について 令和4年度新渡戸カレッジ諸会議開催予定について
第2回 令和4年5月10日（火）	協議事項1 協議事項2 報告事項1 報告事項2 報告事項3	令和4年度新渡戸カレッジにおける検討課題等について（案） 令和4年度評価委員会における評価活動について 令和4年度新渡戸カレッジ入校者数について フロンティア基金（新渡戸カレッジ関係）寄附状況について 令和4年度SGU予算について
第3回 令和4年6月3日（金）	協議事項1 報告事項1	令和4年度評価委員会における評価活動について 令和4年度スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）関連予算の配分について
第4回 令和4年7月1日（金）	協議事項1 協議事項2	令和6年度以降の「新渡戸カレッジ」構想（案）について 令和4年度　第1回　評価委員会について
第5回 令和4年9月2日（金）	協議事項1 協議事項2	令和4年度第2回評価委員会（アンケート調査）について 新渡戸カレッジ活動報告書（仮）の作成について
第6回 令和5年1月6日（金）	協議事項1 協議事項2 協議事項3	令和5年度　招へい教員（客員教授）の推薦について 令和5年度　高等教育推進機構（新渡戸カレッジ教育研究部）兼務教員の推薦について 令和5年度　新渡戸カレッジ諸会議開催予定（案）について
第7回 令和5年2月7日（火）	協議事項1	新渡戸カレッジ修了生等アンケートの実施状況について

(8) 今後の新渡戸カレッジの運営に関するワーキンググループ検討事項等一覧

開催年月日	検　討　事　項　等	
第1回 令和3年11月25日（木）	検討事項 報告事項	今後の新渡戸カレッジの運営について 令和3年度第4回HUCI統括室会議の開催について
第2回 令和3年12月9日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第3回 令和3年12月23日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第4回 令和4年1月13日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について

開催年月日	検　討　事　項　等	
第 5 回 令和 4 年 1 月 27 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 6 回 令和 4 年 2 月 9 日（水）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 7 回 令和 4 年 3 月 10 日（木）	検討事項 1 検討事項 2	今後の新渡戸カレッジの運営について (1) 今後の予算計画について (2) 令和 6 年度以降の教育課程について 令和 4 年度の WG 開催日程について
第 8 回 令和 4 年 4 月 7 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 9 回 令和 4 年 5 月 19 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 10 回 令和 4 年 6 月 2 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 11 回 令和 4 年 6 月 16 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 12 回 令和 4 年 6 月 30 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 13 回 令和 4 年 7 月 14 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 14 回 令和 4 年 7 月 28 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 15 回 令和 4 年 8 月 18 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 16 回 令和 4 年 9 月 1 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 17 回 令和 4 年 9 月 20 日（火）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 18 回 令和 4 年 9 月 29 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 19 回 令和 4 年 10 月 13 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 20 回 令和 4 年 10 月 27 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 21 回 令和 4 年 11 月 10 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 22 回 令和 4 年 11 月 24 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 23 回 令和 4 年 12 月 8 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 24 回 令和 4 年 12 月 22 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 25 回 令和 5 年 1 月 12 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 26 回 令和 5 年 1 月 26 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 27 回 令和 5 年 2 月 22 日（水）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について
第 28 回 令和 5 年 3 月 9 日（木）	検討事項	今後の新渡戸カレッジの運営について

15　新渡戸カレッジ　広報資料一覧

【学部教育コース】

〈広報資料〉

1）新渡戸カレッジパンフレット
2）新渡戸カレッジパンフレット（2022 年度版）
3）新渡戸カレッジ企業用パンフレット
4）新渡戸カレッジ企業用パンフレット（2021 年度）日本語版
5）新渡戸カレッジ企業用パンフレット（2021 年度）英語版
6）新渡戸カレッジ生募集用チラシ
7）新渡戸カレッジ生募集用チラシ（2022 年度版）
8）新渡戸カレッジ同窓ネットワーク誌
9）北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク誌「ACROSS3」（2022 年度版）

〈報告書〉

1）リサーチインターン報告書　2018 年 2-3 月　沖縄科学技術大学院大学（OIST）
2）リサーチインターン報告書　2017 年 2-3 月　沖縄科学技術大学院大学（OIST）
3）Reports of Reserch Intern, Feb. -Mar. 2017 OIST
4）リサーチインターン報告書　2016 年 2-3 月　沖縄科学技術大学院大学（OIST）
5）Reports of Reserch Intern, Feb. -Mar. 2016 OIST
6）2016 年度国際 FD ワークショップ
7）2015 年度国際 FD ワークショップ
8）2014 年度国際 FD ワークショップ
9）国際 FD ワークショップの資料はこちら（北海道学術成果コレクション）
10）2016 年度ボランティア一日体験実習報告書
11）2016 年度ボランティア報告書
12）2015 年度ボランティア報告書
13）2014 年度　ボランティア報告書

〈その他〉

1）「新渡戸カレッジ」の設立について
　※出典：『北海道大学　高等教育推進機構ニュースレター　No.93』
2）多田フェローゼミの記録（2019 年度）

〈参考図書〉

1）グローバルリーダーを育てる北海道大学の挑戦Ⅱ（玉城 英彦／帰山 雅秀／弛 和順（編著））
2）新渡戸稲造　日本初の国際連盟職員（玉城 英彦著）
3）グローバルリーダーを育てる北海道大学の挑戦（玉城 英彦／帰山 雅秀／弛 和順（編著））
4）新渡戸稲造に学ぶ　武士道・国際人・グローバル化（弛 和順・佐々木 啓（編著）、ミシェル・ラフェイ、権 錫永、山本 博文、トレント・マクシ、白木沢 旭児、日野 峰子）

【大学院教育コース】

〈広報資料〉

1）パンフレット（2022 年度）
2）ポスター（2022 年度）
3）フライヤー（2022 年度春入校）
4）フライヤー（2022 年度秋入校）

HOKKAIDO UNIVERSITY Nitobe College

〒060-0817　札幌市北区北 17 条西 8 丁目
北海道大学学務部教育推進課
新渡戸カレッジ推進事務室　新渡戸カレッジ担当
URL　：https//nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp
Email：nitobe-college@academic.hokudai.ac.jp

2023 年 7 月発行